
聖杯闘争

煙草男爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖杯闘争

【NZコード】

NZ3239X

【作者名】

煙草男爵

【あらすじ】

第5次聖杯戦争へと介入する事となつたHELLSHINGのアーカード。

本来交わること無い英靈同士の闘争にまた一人、化け物が参加する。

1話・来日

「根源へと至る穴を穿つために世界の修正を」まかす偽装戦争…」

与えられた資料を捲りながら数少ない情報でその真意を読み取る赤い吸血鬼。

彼の現在の名はアーカード。王立国教騎士団に所属する化け物狩専門のゴミ処理係りだ。

「英靈の魂で器へと魔力を補完…」

紙を捲る小さな音と同じく「り」との声で呟く。

「英靈をことあるごとに唯の糧扱いとはな。
これだからメイガス（魔術師）とは度し難く傲慢で素敵なものだ」

くづくづくと凄惨な笑みが形を作っていく。

「いいだろう。その偽りの戦争に我が牙と銃を持つて真の地獄を具現させてやるとしよう」

彼の手にあつた資料は重力に従い床に落ちる。

その持ち主の姿は音もなく闇へと同化していった。

部屋に残されたの物は吸血鬼の笑い声だけだったといつ。

「プロローグ」生きる（シセル）
英雄バケモノ

王立国教騎士団、HELLSHINGにある依頼が来たのは1週間前。

その依頼主はヘルシングのスponサーの一 角であるアインツベルン家。

ヘルシング当主であるインテグラにはこの依頼主を突っぱねる程自分の組織に金銭的余裕があるとは思つていなかつた。ゆえにその依頼をアーカードへと託したのだが…。

「冬国^{クライアント}の磨き屋の依頼だと？ しかも場所は日本？ くそ、こちらも本部から戦力を割く余裕など無いと言つのに…」

インテグラは自室の椅子に深く身を沈めながら呟く。
先日、敵対組織であるミレニアムの襲撃を受けたばかりのヘルシング。

ゆえに現在ヘルシングが保有する戦力はアーカード主従とウォルタ一執事。

更に最近雇つた傭兵集団しか存在していなかつた。
こんな状況で日本などという極東に戦力を派遣すれば本部の警備はガタガタになつてしまつ。
だからと言ってアインツベルン程の巨大スponサーの依頼を拒否するわけにはいかない。

インテグラは軽い頭痛を感じて眉間に押さえた。

「ならば私だけで行こう」

「…いつからそこにいた」

いつの間にかインテグラの眼前に悠然と立つ赤い服の大男。
彼こそがここ、ヘルシングが誇る最強で最悪の戦力、アーカードである。

「いつでも。加えて言うならどこにでも」

「下らん。猫箱に収まる程矮小な存在ではないだろ？貴様は」

小さなやり取りで少し頭痛が治まる気分がした。
これは彼なりの励ましなのだろ？

「確かに確かに。私ほどの化け物を檻に納めることが出来るのは未
来永劫我が主だけだろ？」「

クククと笑う彼の目は大きめの眼鏡によつて伺うことができない。
しかしどうやら機嫌が良さげであることだけは伺い知れた。

「セラスとウォルター、加えて傭兵の連中さえいれば警備も問題は
無い、か…」

覚醒を始めたアーカードの僕であるセラスの戦力は以前と比べて爆
発的に増加している。

ゆえにこの任務、アーカード単騎で向かわせる事も良いかもしけな
い。

「其の通り。死神が付いていれば婦警も働くこともできよう。
なに、鍊金術師の依頼などヘルシングが総出で出る必要もあるまい」

そう言つて机の上にあつた依頼書を掴むと部屋を跡にじょとする
アーカード。
それをインテグラが制止した。

「待てアーカード。まだ私が命令を下していない」

その言葉に立ち止まりキヨトン、と何百年を生きる吸血鬼は呆け

た表情を作る。

そしてすぐに笑いながら謝罪した。

「申し訳ない我が主。極東の鬭争を夢見て些か不注意だつたらしい。では改めて伺おう。どうする? インテグラ」

インテグラは一瞬眼を閉じるとすぐに見開き僕へと命令を下した。

「怨敵の殲滅。これこそHELESHINGの存在理由、貴様の存在意義だ。
オダ
命令、日本の冬木にて 全ての敵を殲滅。行け、アーカード」

「了解した、マイマスター」

そうして、現代を シセル 生きる バケモノ 英雄が極東の地、日本へと向かうこととなつた。

日本のホテルの一室。

与えられた資料を見ながらアーカードは標的の確認をしていた。

標的の名は間桐臘見。魔術師あがりの2百年を生きる化け物らしい。

「不完全ながら死徒となつたか。…人の身を捨て命を望むか弱者が」

老人の写真を見ながら吐いて捨てるように呟く。

彼にとって人間は愛すべき敵であり恋人である。

そして、いつか自分を殺す存在は人間であると確信している。

同属嫌悪かもしれないが彼はそんな道を外れ化け物となつた人を捨てた存在を嫌悪していた。

AINZULBERNの依頼は魔術儀式である聖杯戦争における宿敵及び、その他の障害の排除であった。

そしてその標的の一番となつたのが始まりの御三家の一つである間桐家。

そこの当主である間桐臘見は己の延命のために聖杯を利己的に使うと曰論んでいるのが

AINZULBERNに露呈したのである。ゆえにAINZULBERNの当主であるアハトは

化け物専門の組織であるヘルシングへと依頼を申し出たのだ。

「方法は問わず。しかし聖杯戦争の運営には支障をきたさない程度に」

資料の最後に赤文字で書かれた事項を読み上げながらアーカードは不愉快そうに呟く。

「やはりメイガスというのは惚れるほどの中心。

鬭争において私が表に出ないはずなど想像できるだらう？」

しかし一転、アーカードは笑い出す。

「どうか…ならば私もこの戦争に参戦すれば良い。

参加者ならば我が銃も夕夜のみならず陽光の元、火を吐くこともできる」

名案だ！ と言わんばかりに輸血パックをご機嫌に飲み干す。

彼のこの決断が正史におけるこの戦争を更なる地獄へと変貌させる

事になるのを予見できたのは未だ誰もいない。

「喜べマイガス諸君。教えてやうつ、本物の闘争といつ物を」

「まさか…騎士団が動くとは…」

教会が本来の在り方と懸け離れた空氣を醸し出しているのは本国から送られた報告を読み上げている神父の表情のせいだろう。ここに神父であり今回の聖杯戦争の監督役である吉峰綺礼は思いもよらぬ報告に眉を潜めていた。

「しかもかのアーカードだと？ アインツベルンめ、聖杯を望む余り狂犬を放つたか…」

実際にアインツベルンが使役するサー・ヴァントはバーサーカー（狂者）であつたし

皮肉にもあながちこの表現は間違つていらないだろう。だがかのアーカードは完全に別種であり異種である。その正体は今世紀における最強最悪の吸血鬼だ。

落ちた真祖、通称『魔王』である彼に対峙できるのは現代においては埋葬機関の一部、

13課の一部か、それこそ真祖の姫君以外に考へることはできない。

…なるほど、英靈が集う戦争に相応しい駒である。綺礼はその事に気づくと自然と笑みがこぼれた。

「かの御仁は私に更なる地獄を見させてくれるか

かくあれと思っていた今回の聖杯戦争に参入した想定外のイレギュラー。

しかしその存在は歪でありながら綺礼に新たな道を示してくれるかもしれない。

それと思うと笑いが止まらなくなる。

「13課め。隙あらば日本での彼の殲滅を考えての報告であろうが……。

理想郷（地獄）の具現の邪魔はさせん。この言峰綺礼の監督権限においてこの件、私が全て預かるつ！」

その狂った笑いは邪悪であり神聖で、教会に響くに相応しい鐘のようだつた。

（1話：接敵）

聖杯戦争開戦の直前。

アーカードは夜の冬木の町を歩いていた。

彼の今の目的は間桐臘見であつたがそれ以上に聖杯戦争に呼び出される英靈への興味が勝つていた。

機会さえあれば”人間の英雄”と剣を交えてみたかったのである。

「良い夜だ。こんな夜は血でも飲みたくなる……」

そう呟きながら彼は人気の無い公園を歩く。

”人気の無い”。いや、”人気が無さ過ぎる”公園を。

「逢瀬には御誂えの舞台だ。感謝するぞ、人の子よ」

歩みを止めた吸血鬼が振り向いた先には全身を青色の軽装で纏めた槍兵が立っていた。

アーカードが異常であるならば彼は異質。二つの神秘が日常の象徴である公園に佇んでいた。

「テメエ、何者だ。人（魔術師）でも無ければサーヴァント（英靈）でも無いな…」

その表情は彼の持つ真紅の槍と相違ない鋭さを持つている。サーヴァントという規格外の存在の彼から見ても眼前の赤い男は異常すぎた故。

「人払いのローンか。魔術というのは便利なものだな。
人の持つ神秘にしては些か大きすぎる力だ。使い方を誤えれば墮ちるというのに…」

赤い男は青い男に続ける。

「それでも人として生き、死んでいつた兄に敬意を。
そしてそんな兄と出会えた運命に感謝を。さあ、私に闘争を見せてくれ」

「…人の話を聞かねー野郎だな。何者かと聞いている」

槍兵、ランサーの視線がますます剣呑なものに変わっていく。

「ふむ。この戦争に則つて言えば”ランサー（串刺し公）”と言つ

た所か

アーカードはこれもまた一興、といった感じで薄く笑いながら質問に答えた。

そして、その言葉にランサーの先ほどまでの敵意が霧散する。

「… そうか。俺を前にそづな乗るか」
ランサー

そして変わりに膨れ上るのは膨大な殺意。ローンにて払いきれた
かつた小さな動植物達が音も無く悲鳴をあげる。

目の前の男は敵だ。英靈である前に人であるランサーの本能がそう告げていた。

「いいぜ偽者。テメーは穴を空ける程度にすませるつもりはねえ。
そのふざけた口ごと頭を抉つてやる」

「心躍る。さあ来い、人間よ！ 私の心臓を貰い受けてみろ！」

「ツ上等だア！」

こうして、人の英靈と化け物の英雄の戦いの火蓋が切って落とされた。

血。

地面に咲き乱れる赤い液体の海。

本来の芝生の緑を全て塗りつぶし侵略するような膨大な侵略兵。

バシャバシャビチャビチャと止むことなく振り続ける真紅の暴雨である。

その全ての出所は

「カツ… はあ！」

笑いながら槍を受け続けるアーカードの物だった。

「貴様… 化生の者か…！」

槍の連撃に次ぐ連撃を一心に受けている目の前の赤い男にランサーは犬歯をむき出しにしてそう吼える。

高速で槍を避けつつも頭と心臓、他の五臓六腑に穴を空けるアーカードが今も笑い続ける異様な光景に合点がいったランサー。

「左様。私は化け物。フレーバー人の世に蔓延る悪鬼羅刹だよ」

今度は右の頭部を抉られる。

だと言うのに変わらず笑い続けるアーカードに敵意が膨れ上がつていくランサー。

ランサーは正英雄である。

そんな彼にとつてアーカードのような反英靈を許し認める道理は無い。

世界との契約による補正もそれに拍車をかけた。

「鬼風情が！ 我が槍を受けそれでもなお笑うか！」

突きに続いて雑ざが払われる。

それは一撃に見えて高速で左右へと切り返す不可視の切り返し。

一瞬でアーカードの体は3つに割かれてしまつ……が

「嬉しいのさ。やはり化け物を殺すのは人間だ。

世界などといつ偽善神に後押しをされてるとは言えよぐぞここまで練りあげた！」

ジユルジユルと離れた胴体の切断部位が糸を引いて繋がっていく。10人全てがその光景をこう言つだろう、化け物、と。

「お褒めに預かり光榮だな！ ならこれも食らつてみるか！…」

次の瞬間、ランサーの刺突がアーカードの心臓を中心に数十の残像を生み出し飛来する。

しかしそれは早すぎるために多く見える物。即ち全てが実像である。その刺突の雨はアーカードの体に穴を空けるだけに留まらず千切り、吹き飛ばす。

「…素晴らしい。

既に私を20回は殺している…。貴様の槍に込められた殺意が心地良いぞ！」

しかし当のアーカードはすぐに復活を帰す。

命のストック？ いや、単に内包する命の数が膨大すぎるのだ！ そう考えたランサーは一旦距離を取ることにする。

1撃必殺が武器のランサーにとつて数百万の命を内包するアーカードと相性が悪いからであった。

「…化け物が」

口惜しそうに呟くランサーに嬉しそうに、楽しそうにアーカードが

返答する。

「ならばソレと対峙してゐる貴様は何だ？ 化け物か？ 英雄か？
…それともただの戌畜生か？」

そうアーカードが言葉を放つた瞬間。

ゴウ、と

これまでに無い程の灼熱の殺意がランサーの周囲を焦がす。

「…俺を成と言つたな…。ならば食らうか、我が必殺の一撃を…」

周囲を包む殺意が槍の先端に収束していく。

これぞ、サーヴァントの象徴であり、必殺の”宝具”の展開である
とアーカードは瞬時に悟る。

そのあまりの熱気によりアーカードは初めて笑みを消した。

「ほう。因果の干涉…。それに成と呼ばれ激昂するその在り方。
どうか、貴様…アイルランドの光の御子か」

「クー・フーリン。それが俺の真名だ。この名を知った以上、貴様
はここで死んでもらうぜ」

槍を掲げ身を深く沈めるランサーの体制は槍”と”を”投擲”する
姿勢に他ならない。

彼の四肢が筋肉の膨張によりシミシミと音をあげていく。

「ククク、確かにそれならば私を殺せよ。さあ、私の心臓を」

「貴様の心臓 貰い受けん」

先ほどまでの殺意の暴風が一瞬で止み…爆発

「刺し穿つ（ゲイ）

「…あんだと…？」

するまえに霧散してしまつ。

その視線はアーカードではなくどこか遠方へと向いていた。

「…つち。野暮用だ。この勝負預けるぜ…」

一気に表情が苦々しげに歪み、槍をヒュンッと回して血糊を飛ばすランサー。

そしてそれ以上に憎憎しげに眉を潜めるアーカード。

「主の命か」

「！」答だ。アンタに全力を出す」とまかりならん、田撃者が生存していたのでその抹消を優先するように、だとさ」

余計な真似を、とお互いに構えを解き睨み、笑いあう。

二人はお互い不完全燃焼だ。余計な横槍を入れた魔術師に文句の一つや二つ出るのもしょうがない。

「てめえ、名前は？」

そう言つて撤退の姿勢をとるランサーに

「アーカードと。」この戦争に則つて言つならば真名は『ガリード・ツエペシゴ』」

アーカードは自分の人の頃の名を語つつもりはなかつたが先ほどのランサーのやり取りを思い出しこの戦争に一つ興じてみることにしたのだ。

そしてそれを聞いて動きが完全に止まつたランサーは一瞬顔を固めた後に豪快に笑い出す。

「ブッ…ハハハハハハ！ そうかそうか！ かの”串刺し公”か！ 確かにランサーを名乗るほどの事はあるわな！」

ヒーヒーと笑い続けるランサー。しばし笑い続けると更に彼はこゝ続けた。

「成る程。座に存在しねーのに英靈並みの強さはそういうことか。まさかまだ”生きてる”とは思わなかつたぜ」

「義務と責任を放り投げた愚かで弱い生き物だよ私は」

そう言つてアーカードも笑う。だが彼の笑みはどこか自嘲の念が感じられる物であつた。

それを見て今度こそランサーは地を蹴りその場を離れた。

「てめーは俺が殺す。死ぬなよアーカード」

そう残してランサーの姿は完全に消えた。

その瞬間、人払いのルーンにおける結界は消失し夜の公園に少ない人の気が戻り始めた。

そして、一人公園に残された赤い吸血鬼は再び月を見上げながら咳いた。

「死ぬな、か。殺されるまで…私は死なんよ。
どうか私を殺して欲しい。そして私は死ぬまで闘争を続けることを約束しよう」

世界ではなく自分自身にそう言い、アーカードの姿もまた闇へと消えていった。

こうして、人知れず英雄同士の戦いの一端が幕を閉じた。

1話・来日（後書き）

処女ssです。

Fate/Zeroが始まつたのと他の作者様の作品に感銘を受け
て挑戦してみました。

ていうかコレ、何番戦時？　出来るだけ頑張ります。
僕の独自解釈とか多くありますのでご容赦下さい。
2作品とも設定が難しすぎでしょう。

衛宮士朗は己の無力に
遠坂凜は己の迂闊さに

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンはそんな二人に

それぞれが落胆し此度の戦いの結果の一端に嘆いていた。

「…なにそれつまんない」

セイバーを庇い負傷し、意識を手放した士朗を見てイリヤは口を尖らせ呟く。

彼女が望んでいた復讐に爪ほど届く事が無かつた今回の戦闘。

彼女の落胆は決して小さい物ではなかったのだ。

故にイリヤは己の相棒であるバーサーカーのサーヴァントを連れ、この戦場を後にしようとしたが…

「戦場で背を向けていいのは味方と敵の死体に対してだけだ」

いつの間にか夕闇の一部と化していた男の声がイリヤとバーサーカーをその場に縫い留めた。

「何、アナタ」

不機嫌を隠そうともせずイリヤは突如現れた赤い男に目を向ける。深紅の巨躯。それがまず彼女が抱いた彼へのイメージだった。

次に抱いたのは”下品”という男の存在自体に対する直感であった。

「アインツベルンと我が主の命によりこの戦場に参じた者。名はアーカード」

「…ふうん。貴方がそなんだ」

一応アーカードの事は当主より伝えられていたイリヤは一応の納得を示す。

だが彼に対する嫌悪感は拭いきれないようだ。

じつとアーカードを見つめたと思うとフイフと視線を反らしてため息を吐く。

「…お爺様は随分と下品な駒を選んだようね」

「下賤な身で申し訳ない。どうか寛大に私の存在を許してくれると有難い…」

ニヤニヤと笑いながらアーカードは、それから、と士朗を介抱する凜とセイバーの方に向き直り

「」の4人が敵か

アーカードの視線を浴びて呼吸が止まる凜。

魔術師として死ぬ覚悟はあつた。そしてそれは先刻のバーサーカーとの戦闘でまだ甘い物であつたと痛感したのだが

アーカードから発せられた殺氣はバーサーカーすら凌ぐ凶悪な物で

あつた。

そしてその対象はこの場にいない遠方のアーチャーにまで捉えている。

鷹の田で警戒をしていたアーチャーの表情も更に険しい物となる。

すぐさまセイバーが臨戦態勢を取り、アーチャーも狙撃体制に移るが

「やめなさい。彼らを殺すのは私よ」

まさかのイリヤの助けによつてアーカードの戦意を薄める事ができ

た。

今だけはイリヤに感謝してしまつ凜だったが

「…またも闘争の機会を奪われるか。つべづべ此度の戦場には縁が無いらしい」

先日のランサーとの決着が付かなかつた事が尾を引いているのだろう。

明らかに不機嫌そうな顔になるアーカードはどこか子供のように思えた。

そんな彼にイリヤは呟つ。

「不本意だけど一緒に城まで来なさい。色々説明してあげるから」

「私に鬭争を約束してくれるのはいいが」

「じひとつを用意してあげる。ここから付いてきなさい」

そう言つて踵を返すイリヤは一瞬立ち止まり凜に支えられる士郎へと言葉を投げた。

「次は殺してあげるねお兄ちゃん」

歩き出すイリヤと闇夜へと霧散、消えていくバーサーカーとアーカー。
最後にそこには破壊の跡と静寂だけだ。

こうして残された4人はようやく息を付く事ができるのだった。

「あー！ アインツベルンの奴！ なんなのよ！」

あれから数刻。拠点と定めた衛宮邸の居間では凛が頭を搔き鳴りながら吠えていた。

その姿は彼女の家の家訓である「常に優雅たれ」とはかけ離れた物だった。

そんな彼女を、台所からお茶を持ってきた従者であるアーチャーが諫める。

「少し落ち着けマスター。命があつてのモノダネだろ？」

「そりゃそうだけど……」

「まだ腹の虫が收まらない凛。彼女が落ち着かない原因はやはり先刻の戦闘だ。

「へラクレスっていうだけでアレなのに……まさかクラスがバーサーカーだなんて…チートって奴じゃない……」

ガアーッと再び爆発する凜。

やれやれと首を振るアーチャーはセイバーにもお茶を差し出す。セイバーは士朗の介抱のために彼に付き添っていたのだがこれから指針を決めるために凜に居間に呼ばれたのだ。

当のセイバーはお茶を差し出すアーチャーが妙に様になつていてことを不審に思いながらお茶を受け取る。

「それに最後に出てきたあの男。なんなのよアレ」

ふむ、ヒアーチャが返答した。

「少なくともサーヴァントではあるまい。セイバーも感じただろう」

サーヴァントは特殊なスキルが無い限りお互いが接近すればその存在を感じることが出来る。

それはアーチャーもセイバーも共通して感じた事だった。

「ええ。あの男はサーヴァントではありません。

…アレは、化生の類です」

そう言い放つセイバーの顔は少女とは思えない程陥呑としたものであつた。

生来騎士として、英雄として生きた彼女にとってアーカードのような邪鬼は認め得るものではないのだ。

「化生？ …まさか死徒？」

頸に手を置いて思案する凜。

その言葉にセイバーは反応する。

「シトとは何ですかリン」

思案中の凛に変わってアーチャーが説明する。

「分かりやすく言えば吸血鬼の類だ。まあアレはただの死徒ではないだろ？」「

少なくともかなり格の高い存在だろ？」と補足した。

「まさか… 27 祖じやないでしょうね…」

顔が青くなつていいく凛。この想像が当たつていれば最悪だ。
死徒を束ねる27の存在。未だその全容は明らかになつていないし、
いくら天才とは言え単なる魔術師である自分が
相対できる存在ではない。バーサーカーだけでも頭痛の種なのに、
想像通りならばまさに最悪の展開だ。

まともに戦おうと言うのなら教会の代行者かそれ以上、つまり埋葬
機関並の戦力が必要だ。

「それはあるまい。辺境の高潔たるアインツベルンが祖と繋がりを
持つなど在りえん」

なぜそもそも言いきれるのか、意外と魔術の世界に精通するアーチャーに疑問抱く凛であったが
彼の言う事ももつともだった。一応の納得を見せる。

「… そうね。とりあえずアレは高位の死徒と捉えましょう。田下の
問題はバーサーカーよ。」

その件に関しても衛宮君と共に闘の話をしないとね」

打つて変わつて悪い笑みを浮かべる凛に力強く頷くセイバー。
残されたアーチャーは不機嫌そうにやれやれと首を振る事しか出来なかつた。

「まさか貴方が、あのツェペシュ公だなんてね……それって生きた英靈じゃないの」

「その名は捨てたわけではないが私にとつて罪の象徴だ。あまり何度も聞きたくはないな」

冬の城、アインツベルン城の応接間の大きなテーブルを挟みイリヤとアーカードは紅茶を飲んでいた。

いや、アーカードは口にしてはいなかつたが。

「なによそれ。人間を捨てた事が罪だと言うわけ？」

カップを置いてそれが気に食わないといわんばかりの視線で問いかけるイリヤ。

彼女にとって第3魔法の実現は人の器を捨て去り高次の存在となる事と同義。

それ故にそれ自体が罪であると言つよつたアーカードに不快感を示す。

「まさか。人であつた頃の私自身の存在が罪なのだよ。捨てた捨て

ない等と、そんな事は些事だ。

私の言うソレは人として生きる事、即ち在り方だよ

目を閉じ遠くを見つめるよ「ひ」の過去を思い返すアーカード。
それはどこか後悔しているようで悔蔑しているような笑みだった。

「ふうん。死徒もそういう事を考えるのね。皆が皆、利己的で傲慢
だと思ってたわ。

己の存在を嫌うなんて貴方、『まぞ』ってやつ?」

その言葉を聞いてイリヤの傍に控えていた侍女の1人が怪訝な顔を
する。

一体どこから仕入れてきた言葉だろうか。

「ククク、私を変態扱いするか。せいぜい夜闇には気をつけろ」

「私のバーサーカーを出しぬけるのならいつでもいいだ?

二人はコロコロと笑う。一体何が面白いのかとセラはますます怖い
顔になつていった。

そんな事は露も気にせず笑い合う一人だつたが…

「それはそうとこの身は墜ちたとは言え真祖。死徒などと一緒に
にされるのは心外だ」

「ぶつ……」

「お嬢様!」

突然の予想だにしない発言に口に含んだ紅茶を勢いよく吐きだすイ

リヤ。

幸いにもアーカードとは距離があつたために彼に被害は無かつたが、いよいよセラは自分の主の行いに苦言を呈す。

「し、真祖ですって？！」

「つむ。メイガスの基準で言えばそつなる」

アーカードは興味なさそうに、だが重要な事だ、といった感じで言った。

対してイリヤは思いもよらぬ眼前の吸血鬼の正体に驚愕を隠せない。

「ドラキュラが真祖だなんて知らないわよ！」

「それは人による伝承で脚色された御伽話にすぎん。私がこの方、血を吸つたのはただ1人だ」

それはドラキュラ伝説に語られる女性、ミナ・ハーカーの事なのだがイリヤはそこまで伝説に詳しくは無い。

物騒な御伽話を好まなかつた両親の教育にもよるものなのだが、イリヤにとってこの事実は驚くに値するものだつたらしい。

ちなみにアーカードの眷族であるセラスは血を吸われたわけではなく、血による契約なのでこれは吸血行為に含まれない。

「…ふうん。凶悪な顔して意外と一途なのね貴方。…でも、真祖と話せるだなんて光榮だわ」

「別に珍しくもなかろつ。聞く話によれば真祖の姫君など寵愛する人間のために日の元を出歩いているらしいからな」

「？ 姫君つて”あの”ブリュンスタッドかしい

「白い方だがな。会つた事は無いが我々の業界では有名な話だ」

「へー。真祖つて実は自由奔放？」

「わつでなくては私はこの場にいない」

「くす、確かに」

知られるべし伝説の生態を知る事ができてイリヤは少し上機嫌だつた。
そして、彼らも知らない事だが同じ日本のある街で話に上がつた白
い姫君がクチュン、と可愛いくしゃみをしたとかしなかつたとか。

「…ともや英國騎士団が参戦するとはひ

キィキィ。

それは蟲の命體。

そしてそれを指揮する妖怪の声。

「いやはや。アインツベルンも思い切つた事をするものよ。あの化
生を御しきれるとでも思つてこらのか

キィキィ。

蟲達が笑うように同意を示す。

「これは計画を少し見直す必要がありそつじや。十中八九、ワシを狙つた刺客じやろ。
…アサシンよ、常、田を離すでないぞ」

蟲の王である老人の命を、同じく蟲にいた骸骨の仮面を被つた暗殺者が承る。

「御意」

そして闇へ消えた己のサーヴァントを見送り老人は笑つた。

「力カツ。見方を変えれば彼奴の血さえ手に入ればワシの望みにも別の道が見えるというもの。
成程、此度の聖杯はワシに味方しているらしい。
よからう、この間桐臘見。隠れはするが逃げはせん。いつでもかかつてくるがよいわ吸血鬼！」

数百年を生きる妖怪は狂つたように歡喜の笑いをあげる。
それに反応するかのように数万の蟲達も笑う。
この蔵の中で唯一笑わなかつたのは蟲達に犯される1人の少女と彼女のサーヴァントのみであつた。

AINTSBERLNの屋上。
ARKARDは己のクライアントであるイリヤ嬢の命を反芻しながら月を見上げていた。

「お兄ちゃんとお姉ちゃんには手出し無用よ。アレは私の獲物。アーカード、貴方はそれ以外のマスターとサーヴァントを相手にしないさい」

これがイリヤによつて下された命である。

彼は一目見た瞬間にセイバーと戦う事を望んだ。故に彼は不満を零したのだが

「そんな可愛くない顔しないでよ。それでもまだ4人のマスター達がいるでしょ。それに英靈は貴方の望む闘争を叶えてくれる。なんなら私のバーサーカーとでも踊つてみる？」

正直な話、アーカードはヘラクレスでさえも圧倒できる相性があり勝利できる確信はあつたが、
後の事を考えればアインツベルンと敵対する素振りを見せるわけにはいかなかつたので承諾せざるを得なかつた。
じつ見えて主の事をよく考えている忠臣であるアーカードなのだ。

「…ふん。私を飼つつもりか磨き屋よ。^{アインツベルン}いや、噛まれる覚悟はあるのか」

己の相棒である巨大な拳銃を撫でながら1人笑う。

「これだから人とは高慢で愛おしい。せいぜい私に鞭打ち、使うが良い。
私の牙が己に向く前に聖杯を手に入れろ。それまで私は少ない闘争を楽しむとしよう」

454カスール、巨大な白い拳銃を月に向け、放つ真似をする。

「BUNG・さあ、勝利は誰に約束される？　私の銃は血に飢えているぞ？」

ククク、と彼の笑い声は小さいながらもアインツベルンの城一帯を包みこんでいった。

ちよつと短めです。

バチカンの一角にはとある教会が存在する。だがその存在を知るのは限られた者達だけ。その全てはこの世界の神秘に少なからず触れた裏側の者達である。

そんな非常識な存在達の中、更に際だつて浮いた存在が一つ。礼拝堂の長椅子に距離を置いて座っていた。

片方は神父。

温和な顔立ちをしているが、顔面の至るところにある傷のお陰で彼が普通の神父でないことが分かる。

片方は修道女。

彼女もまた温和な顔立ちをしているが、どこか疲れた表情をしていた。

だが彼女もまた神父と同じくただの修道女のはずがなかつた。

「13課（我々）の邪魔をするつもりか埋葬屋」

「今の日本に貴方達のような狂信者イスカリオテを受け入れる余裕は無いんです

よ」

神父の目は表情と違つて殺氣すらこめられた険悪な物だ。それを修道女は飄々と受け流しながらため息をつく。

「アンデルセン神父、貴方も分かつていてるでしょう。

ただでさえ今現在の日本には死徒と真祖が集中しきっています。そんな所に貴方を送ればどうなるか。火を見るより明らかじゃないですか？」

それこそ火薬庫に火のついたマッチを投げこむに等しい行為だ、と修道女は言つた。

その言葉に意味も関係もない、と鼻を鳴らしながらアンデルセン神父は答えた。

「シスター・シエル。アーカード奴以外の死徒については貴様達（埋葬機関）が原因だろうが。

我々にまでそちらの事情を持ちこむな。こちらはこちらで動かせてもらひや」

「…アーカードの潜伏先にはきちんとした教会の監督役が出向いています。

それに冬木のアレは教会と協会が水面下で手を結んだ魔術儀式です。いざとなれば本部が動くでしょう。

だから、今はまだその時じゃないと言つてているんです」

「ふん。奴が私以外に止められるものか。蛇を追つあまり、他の化け物の事を軽視しているのではないか？」

シエルの必死な説得に聞く耳も持たないアンデルセン。彼にとってアーカードの件はそれほどまでに大きく彼の存在のウエイトを占めているのだ。

それを知っているからこそシエルはため息が止まらない。なんとかしてこの戦闘狂を留めなくては。

それは、埋葬機関1位と13課のトップの命でもあった。

”王立国教騎士団と事を荒だてるな”

それが一人からの指令。これに、日本の内情に詳しいシエルが選ば

れてしまったのだ。

「（ナルバレック、マクスウェル卿…恨みますよ…。ジーザスハレルヤ、呪いかくあれ！）」

痛む頭を押さえながらなんとかアンデルセンを説得しようとシエルはとある人物の名前を出す。

「冬木の監督役に付いた者の名前は『キレイ・ムニア』。貴方が懇意になつた人物と伺っています。

彼になら任せ事ができるのでは？」

シエルのその言葉にこれまでと違つた表情を造るアンデルセン。その表情は驚き。しかしそれは喜びのソレでなく憤怒のソレだ。

「…なんだと。あの異常者を送つたと言つのか！」

アンデルセンの反応はシエルの想像していない物だった。なぜアンデルセンが反感するのかが今一つ、理解できない。

「？ 彼は肅然とした使徒の鏡であると聞いていますが」

「ハツ！ 奴が鏡ならば我々はそれこそ国宝級のソレだ！ あのような異常者が戦場を目の前に黙つているはずがなかろう！」

そう言って立ち上がりとしたアンデルセンだが何かを思いついたのか、再び椅子に座る。

「…どうか。確かに奴ならば異教徒もろとも地獄に落とす事ができるか…？」

不穏な単語が出た事で今度はシェルが動搖する。

「ちよ。どうこう」とですか?」

「同僚の代行者の事も知らぬか。奴が内包する混沌を見抜く事が出来ぬとは。埋葬機関も墜ち潰れた物だ」

今度こそ立ち上がり礼拝堂を後にしようとアンデルセンをシェルが引きとめるが

「奴の経歴を洗つてみるがいい。何の汚れも無い奴の過去がどれほどオカシイ事か分からぬお前らもあるまい」

「…貴方はどうするんですか?」

アンデルセンの背中を見つめながらシェルは問う。
それに彼は笑いながら答えた。

「クク、言峰神父の事だ。アーカードの参戦を喜んでいるに違い無い。故に奴はあえて手を出さず傍観に徹するだろ。ならば救われぬ子羊が出るのは必須。なんのための教会の使徒か、私が救つてやらねばなるまい」

「はあ…。結局日本に向かうんですね…」

そうして教会を後にしたアンデルセンを見送り、この事を上ビビリ報告したものかとシェルは再び頭を押さえてしまった。

「やはり1-3課も動いたか…」

「ええ。しかも、やはりというか日本に向かつたのはアンデルセン
神父のようですね」

「げえつ！ マ、マスターが危ないです！」

場所は変わつて王立国教騎士団ヘルシング本部の当主室。
そこで教会の動きを報告で受けたインテグラ、ウォルター、セラス
はそれぞれの反応を見せた。

特にセラスはその報告を聞いて、過去に自分達が受けた危機を思い
出し自分の主であるアーカードの身を案じたのだが

「救いは埋葬機関が動かなかつた事か。ナルバレック卿には後で菓
子折を届けるべきか…」

インテグラはセラスのようには思わず、今回裏で動いたであろう埋
葬機関1位の女性を思つ。

「左様ですね。私の方から送つておきましょ。ちゅうど年代物の
ワインが王室から届きましたので」

ウォルターが思いだしたかの様に先日本部に届いた女王陛下からの
贈り物を候補に上げた。

「ナルバレック卿の口に合つと良いがな。彼女の狂つたグルメつぶ

りには流石の私も案が浮かばんよ

以前の会食を思い出し頭を振るインテグラ、そしてそれに同意を示すウォルターであったが、そんな一人に食つてかかるセラス。

「ちょ、ちょっとー？　あの化け物神父様が日本に向かつたんですよー！」

早くマスターに増援を送った方がいいんじゃないですか？！

その言葉を聞いたインテグラとウォルターはキョトン、とした表情で聞き返した。

「誰だ？」

「マスターにです！」

「増援を？」

「あ

ようやく二人の言わんとする事に気づくセラス。

アーカードに増援？ 必要かそれ？ と。

「そういうことだセラス婦警。奴に増援など送つてみろ。棺桶に詰まつた肉片が国際便で帰つてくるぞ」

「しかも着払いですな

インテグラとウォルターの例えにならない例えが軽く想像できてしまい、唸るセラス。

そうだ。自分のマスターであるアーカードはアンデルセン神父以上の化け物だった…。

増援を送るなら敵に送つたほうが良いのでは？と思つてしまつ程に。

「なに、いざとなれば貴様とウォルターに向かわせる。今のところは様子見だ」

そう言つて紅茶を手にとるが、冷めてしまひましたので、とかップを交換するウォルター執事に礼を言うインテグラ。セラスは神父と主の闘争に巻き込まれるであろう現地の人々を心配してしまつのであった。

日本、冬木市。

多くの陣営がその動きを見せ始めた中で一つ、守りと傍観に徹する陣営が存在した。

それは冬木の靈脈の一つである柳堂寺を拠点とするキャスターである。

彼女は遠見の魔術で今現在行われている山門の戦闘を見、驚愕の表情に包まれていた。

「なによ、コレ…」

閉じた視線の先で行われているのは木々をなぎ倒し地面を抉る非日常の光景。

彼女にとつてそれは別段珍しい事ではないのだが、彼女を驚愕させてる要因は別にある。

それはキャスターが魔術師として呼び出したイレギュラーであるアサシンの戦闘相手。

サーバントを相手に互角以上に戦う化生の存在であった。

・・・

「シツ！」

山吹色の陣羽織に身を包んだ侍。彼の名前は人呼んで佐々木小次郎。かつてこの地にいたとされる農民の夢見た、英雄と言つたの亡靈である。

当の本人はそんな事は気にもせず、戦いを求めた此度の戦に心躍り、感謝するだけであった。

そしてその感謝は今をもつて最高潮に達している。

彼の振るう長身の刀、伝承に伝わるかの”物干し竿”が空と共に化け物の肉を裂く。

ザフッ！ と重い音を立てる原因は斬り伏せた対称の存在密度の高さ故。

本来の彼の太刀筋ならば音も無く対象を斬る事が可能なのだが、いかんせん今回の相手の存在は規格外。

だがそれすらもアサシンにとつては僥倖と言える物だった。

「腕のみで私を斬るか。和国の侍がこれほどとはな！」

斬り、吹き飛ばされた自分の右腕を眺めながら笑う赤い大男、アーカードはアサシンに忌憚の無い意見を述べる。

それを聞いたアサシンは邪氣の無い笑みで答えた。

「お褒めに預かり恐悦至極。非才の身で鍛錬したこの刀が御身に届くとは、中々どうして嬉しいものよ」

喋りながらも剣撃は続く。アサシンの剣術はこの世に在るべきの神秘に及ぶ。

そしてそれを受けながらもアサシンと同じく喜悦するアーカードも人成らざる者であった。

「貴様の剣は私に届くのに、私の弾丸は貴様に届かないのが何とも煩わしい。そら、私にも喜びを感じさせてくれ！」

アーカードの右手にある白く、巨大な拳銃、454カスール カスタムオートマチックがアサシンに向かって圧倒的な破壊力を持つ銃弾を連射する。
だがそれをことごとく斬り伏せて行くアサシンはやはり亡靈と言えども聖杯に選ばれた英靈であった。

「男の恋慕を受ける程、拙者の器量は広くに非ず。
しかし、テッポウを使う化生か。聖杯戦争とは真、趣が凝っているものよ。

門番としての立場に申す事は無かつたがやはり闘争こそが我が身をおくに相応しい」

「同意しよう。闘争こそが我ら化け物の範疇、日陰の血だまりこそが私達の愛しい愛しい遊び場だ！」

拳銃から放たれる銃弾の暴雨がアサシンもろとも一帯を粉塵へと変貌させていく。

だがアサシンの振るう刀はその身に届く前に銃弾を全て斬り伏せて行ってしまう。

「ほう、これを児戯と申すか。拙者にとつては命懸けなのだがな？
これだから人外といつのは恐ろしい」

「ぬかせ亡靈が。笑みを浮かべたまま私の銃弾を落とす貴様こそが
よっぽど人外に見えるぞ？」

「ハハハ。この身はしがない百姓よ」

「ククク。だからこそ人の素晴らしさを改めて実感させられる！」

銃弾の雨がひとまずの休みを得る。

だがそれは戦闘の執着を意味するものではなく、新たな攻撃の訪れを予感させるもの。

「拘束制御術式、第3号、第2号、解放。”クロムウェル”発動。
眼前の敵の沈黙までの限定使用を開始する」

瞬間、アーカードの周囲を血の色をした”闇”が包み込む。
否、それはアーカードの身ら吹き出すモノだ。その異様な重圧と殺意の塊にアサシンは笑みを消す。

「ほつ？ 宝具とやらか？」

『そのような立派な物ではないさ。私の、私だけの、純然たる我が意思、殺意の解放だ』

闇と化した一帯からアーカードの低く恐ろしい声が響く。

その声はアサシンだけでなく、それを見るキャスターさえも震撼させる物だった。

『教えてやろう、吸血鬼の闘争というものを』

闇から躍り出た無数の蟲と獸がアサシンへと牙を向く。

「あり得ない……サーヴァントでない身であれほど戦力を保有しているなんて……」

キャスターは一旦遠見の魔術を解いて、瞳を開け己の杖を撫でる。予想外だ。想定外だ。

拠点、要塞とも言えるこの柳堂寺に単身で乗り込み、イレギュラーとはいえ英靈であるアサシンを圧倒するその存在。

彼女の生きた時代、神代の者としか思えないソレは久しく忘れていた焦燥を彼女に思いださせた。

「くつ。吸血鬼と言つていたかしら。現代の鬼がこれほどまでは想定していなかつた私の過失ね」

撫でる杖を力強く握るとキャスターは山門へと向かうために歩を進め始める。

先程見たアーカードの宝具とも思える物の圧倒的な威力、存在はアサシンを難なく飲み込むだろう。

故に彼女は自分が戦場へと出る覚悟を決めた。

自分の望みを叶えるために。自分の愛する人を守るために。

「くつ！ 奇怪な物よ！ 幾度斬り伏せても首を上げるとは。この身は化生退治の英雄譚に載つた覚えはないといふに」

『ならば今宵、貴様の名を私の蔵書に刻むとしよう』

「ふつ… 一介の百姓を載せるほど飢えているか！」

アーカードの化身とも言える巨大な数頭の黒犬が前後左右からアサシンを襲う。

アサシンはそれを半身を捻りながら鞞と刀で四方なぎ払う事で迎撃する。

しかしその体制を狙つた数百匹の赤黒い百足達が足元からアサシンを再び襲う。

だが

「蟲退治は畠仕事の基本也！」

カツと目見開いたアサシンは仰け反つた体制から刀と鞞を地面に突き立て

それを支えに両足が円を描くように地面を削る。その行為は1秒に満たない物。

その驚異的な早さは衝撃を伴い百足達を一匹残さず吹き飛ばしていった。

『足元ばかり見ていると頭が吹き飛ぶぞ?』

しかし先程散らし、直上の木に引っ掛けっていた黒犬の肉片から除いたアーカードの手に握られていた拳銃がアサシンの頭部を狙つて打ち抜かれた。

そしてそれをギリギリで体を捻る事で回避するアサシンだったが四方上下の攻撃を捌き切る事が出来ず、右足の太ももの肉を銃弾によつて抉られ吹き飛ばされてしまった。

「つぐううー！」

重傷を負つた足で距離を取つたアサシンは両手で刀を構えながらアーカードで”あつた”闇を睨む。

「痛つ……流石よな。我が身では貴公の牙を捌き切る事叶わぬか……」

そう笑いながらも悔しそうに唸るアサシンにアーカードが叱咤する。
『ならば叶える。手足千切れようとも喉が抉られようとも意思あるまで剣をふるえ。
届かぬなら届かせる。叶わぬなら敵うままで足掻け！　それが人の闘争だ！』

暗闇から放たれるアーカードの言葉は何故かそう心から望むと言わんばかりの魂が込められた物。

それを聞いたアサシンも何故か嬉しそうに笑みを作り口を開じた。
「不覚。鬼に教えられるとはやはっこの身には届かず、亡靈でしか無い、か」

だが、ヒアサシンは続けた。

「なればこそ、見せてやろう! その亡靈の魂の秘剣、その身を持つて感じよ!」

その時、その場から動く事が出来ないアサシン、佐々木小次郎の刀から放たれる戦意が闇の中のアーカードまで届いた。それを感じたアーカードは大きく声を上げる。

『そうだ。見せてみろ! 英靈の、人間の真価を!』

「応。常闇の奥底まで響かせてみせよ!』

： 秘劍

空気が凍る。

膨大な氣が周囲を包む。先日のランサーの宝具の発動に劣らない迫力がアーカードを襲つた。

「”燕返し”」

4話・撤退

「秘剣 燕返し」

音は無く

されどその剣3重の風。

一つ目。

アーカードを取り巻く無数の闇を散らす。

二つ目。

肉体へと迫りついた刀が骨肉を断ち心臓へと届く。

三つ目。

道が開かれむき出しになつた真の臓を音無く裂く。

この一連の動作。全てが一太刀の元に出された神秘の剣撃。

彼が亡靈となり英靈と称される所以ともなつた武を超えし魔の域。
人よりも神秘に詳しい魔術師、更にその一握りの者ならばこの現象
をこう呼ぶであろう。

“多重屈折現象” キシュア・ゼルレッチ” と。

「「」ぱあつ！」

心臓を両断されたアーカードはこれまでにない程の血反吐を吐く。
これが人間ならば致死量に匹敵すると判断できるが彼は稀代の化け
物。^{フリークス}

英靈に倒されるべき真の魔物。しかし、アサシンは英靈である前に
亡靈である。くしくもその秘剣は彼を死に追いやる事が出来なかつ

た。

「く…クハハハハ…！　なんと、まさか私の心臓に届くとはな。なんという事だ。此度の鬪争、いまだ2回目だと呟つのに私は全ての戦場で死んでいるぞ！　これが聖杯戦争か…！　なんという樂園！　なんという地獄！　喜ベアーカード、貴様の望む最後はこの極東にこそあるやもしれん！」

「これはこれは。我が秘剣が届かぬか。フフ、未だ精進が足りぬようだ」

「何を言つ侍。確かに貴様の剣は我が心臓を断つた。誇るが良い。貴様こそ人であり人を超えし英靈だ」

「鬼に褒められるとは異な事よ。これが童の話なら江戸の溝に捨てられる価値も無い」

笑い合う一人。片や好敵手に出会えた事、片や己の鍛錬を認めて貰えた事に。

死合いといつ命のやり取りの間に生まれた奇妙な空間であった。

だが、そんな素敵な心躍る場はとある魔女の介入によつて霧散する。それは紫に光る閃光だった。

ドオン、とアーカードがいた場所が光つたと思つと周囲の木々ごと地面をなぎ払う。

アサシンはハツと閃光の出所であるう寺の上空を見やる。そこにはロープを纏つた女が浮いていた。その手には杖。まるで御伽話に出でくるような魔女の姿そのものであった。

「笑い遊んでいる余裕がおありのようね門番。そんな役に立たない道具ならばその鬼と一緒に消えなさい」

「女狐…」

アサシンの表情は彼らしくも無く敵意がにじみ出た物。それはそうだ。彼にとつての愛すべき宿敵が横から入った槍に奪われてしまつたのだから。

だが、そんな彼は杞憂であつた、とすぐさま悟る事となる。

「いいぞ…。またも私の命へと届いた。なんだこれは？　何度私の生と死を脅かせば気が済むというのだ？」

素晴らしい、素晴らしいぞ聖杯戦争！

ドウ！

一陣の風が吹く。

それはキャスターの魔力、アサシンの刀によるものでもない。キャスターの砲撃後に残つた土煙の中。アーカードの死体があるべき場所から吹く魔性の風であつた。

ドオン！

その風、土煙を裂いてキャスターへと一つの物体が飛来する。無論それはキャスターのはつた防御壁に阻まれてしまうがギリギリギリと嫌な音を立てながら壁にしばらく張り付いていた。

「ほう。随分硬いなソレは」

「貴方…まだ生きて…」

「否。死んでいるよ私は。そして貴様も。今から死ぬ、さようなら」

ドオンドオンと今度は連射で放たれる銃弾。そう、銃弾だ。アーチャーの手にある454カスールから放たれる銃弾。

その全てに付与された聖職者による祝福。本来魔の物に対する有効属性であるが、英靈とはアサシンが例になるが、言わば亡靈である。完全な聖属性をステータスに持たない限り英靈にも効果はあるのだ。更にキヤスターの属性には「悪」なる物があり、銃弾の効果はアサシン以上の攻撃効果を持つていた。

「ぐつ！」

「どうした？ ジャパニーズ廻か貴様は。動く事すらせず浮いているだけか。落ちろ紙きれ」

そう挑発される間も連射は止まらない。

その火力はキヤスターの砲撃魔術に比べれば礫のよつなものだが、驚くべきはその連射速度と精度である。

障壁を破らんと一つ一つが全く同じ場所を穿ちに来る。一度障壁を重ねるタイミングを違えば穴があき、体に達するのは必須。ゆえにキヤスター。攻撃できずただただ障壁を巡らす事しかできない。

「アサシン！ その鬼を切りなさい！」

「ふむ」

当然とも言える命令であったがアサシンは何を思ったのかその場から動く事は無かつた。

「何をしているのー。」

激昂するキャスター。必死な彼女はアサシンが見やる山門の会談に意識が向いていなかつた。

だからアサシンは「」が主に教える事にしたのだ。

「それも良いが。拙者、新たな客人の歓待をせねばならぬ」

「つー。」

遙か遠くに見える階段の初めの段。サーヴァントにすれば視認可能なそこには赤い装備の男と赤い髪の少年がいた。

そしてアーカードもそれに気づく。彼は銃撃をやめると拘束術式を解除。いつもの装束に戻ると闇へと消える。

「…なんのつもりかしら」

誰もいない闇へと語りかけるキャスター。そして誰もいない闇から返事が返ってくる。

『なに。私はあの『兵とは相性が悪いのでね。アレは我ら化け物を狩りえるの殺戮者。ヤツの内包するモノは私を殺し得る。未だ仕事が残っている身だ。ここは引かせてもらひうとじよつ』

「再び会つまみえる事は出来るか

アサシンも問い合わせる。キャスターとは違つて友人に話しかけるような親しみを込めて。

『無論。貴様が生き残れば、の話しだが』

「フフフ。それは」ひらの台詞よな

『ククク。またな侍』

「ではまた」

そう言い残しアーカードは心を残しその場を去つた。
そしてこの後、正史通りの戦闘が柳洞寺にて行われる事となる。

「今帰つた」

「あら、おかえりアーカード」

「ふむ。ただいま、と言つておいた方が良かつたか」

「じょーだん。英國じやどうだか知らないけど私の城を家にして帰
る、なんて発想、氣味が悪いからやめてよね」

「なんだ。来訪を認めてくれれば私はお前の心に入れたといふのに」

「それって吸血鬼伝承のあれでしょ？」

「博識だな」

「私を誰だと思つてゐるのかしら…」

フフン、とうつすい胸を張るイリヤスフィール嬢。

彼女の言つ伝承とは「訪問する家にはその家人に招かれなければ侵入できない」という物だ。

しかしこれはアーカードはおろか死徒でさえ無視できるお粗末な御伽話なのだが。

・・・

「じゃあキャスターと交戦したのね？」

「ああ。浮きつぱなしのクラゲのような奴だった」

凧、と表現しようとしたがイリヤが日本の凧を知るわけでもないの
であえてクラゲと言つたアーカード。

「ふーん。まあキャスターなら飛行魔術なんて御手の物でしょ

「私は飛べんがな。蝙蝠の成りをとれば出来ん事もないが」

「なんでもありね貴方。それはそつと氣になるのはアサシンね」

「あの侍がどうかしたのか？」

「アインツベルンの者なら知つてゐる事なんだけど。アサシンのクラスには通常一つの英靈しか呼ばれないの。

ササキゴジロー？ 日本の亡靈がアサシンのクラスで呼ばれるなん

て聞いたことがないわ」

「イレギュラーといつやつか」

「恐らくね。しかもソイツ、キャスターの事を主と書いてたんでしょ?」

「そういえばそうだったか」

戦闘時のやり取りを思い出す。確かにそんな事を言っていたような気がする。

「まったく。サーヴァントがサーヴァントを呼びだすなんて反則よね。ま、伊達に魔術師キャスターのクラスじゃないことかしら」

「待て。なんだそれは」

アーカードが珍しく表情を出して聞いてくる。
付き合いが短いイリヤでもこのアーカードが珍しい事は簡単に予想がついた。

「あら、知らないの。サーヴァントは魔術回路さえあればそれこそ犬猫でも召喚が可能なのよ（まあ見た事はないけど）。

第4次聖杯戦争じゃ魔術回路を持つ一般人がサーヴァントを呼びだした、て記録もあるしね」

「ほひ。ならば私にも可能といつわけか

「あ、無理無理。貴方には魔術回路がないし。ちゃんと確認したのよ私

いつの間に、と少しガツカリした空氣を出すアーカードに笑ってしまつイリヤだった。

「私の中を”見た”のか？」

一転、アーカードの表情が変わる。それは何の感情も見せず、殺意を感じる物だった。

「怒らないでよね。器量が知れるわよツエペシュ公。

一応アインツベルンの協力者なんだから調べるのは当然でしょ？
とは言つてもあんまり深いところまでは”見れなかつた”わ。
あれ以上深く潜つたら私が発狂しちゃうわよ」

ブーと膨れるイリヤ。彼女の表現は過剰なものではなく的確だった。アーカードの中身はかの混沌”ネロ・カオス”と呼ばれる死徒のそれを凌駕する。

なにせ100万以上の命を内包しているのだ。それを全て垣間見れば脳がオーバーヒートを起こし焼きついてしまうだろう。

「賢明だな。さて、これからどうつもりだイリヤ」

彼が名を呼ぶのは彼自身が認めた人物のみ。

インテグラ、ウォルター（たまにセラス）であるがゆえにこの状況は珍しい。

それを知らないイリヤはそうねえ、と普段通りの反応だった。

「とりあえず私は様子見を続けるわ。貴方はこれまで通り遊撃をお願い。あ、でもお兄ちゃんとお姉ちゃんは駄目だよ。お兄ちゃん達を殺すのは私なんだから！」

まるで”遊ぶのは私”というような軽さで殺人の予定を喋るイリヤにこれもまた壊れているな、と笑うアーカードだった。

・・・

夜風にあたるアーカード。

AINZBELN城のテラスは彼のお気に入りの場所の一つになっていた。

他には先程の心躍る戦場となつた柳堂寺があげられる。

彼が生前に短い間だが暮らしたブラン城に似るこの城はどこか彼に小さな安らぎを感じさせてくれるのだ。

「感傷、か。化け物らしくもない」

くくく、と自嘲めいた笑いを零すが彼もやはり人であつた存在だ。これもまた罰であるな、と自虐な思考が働く。

「ランサー、キャスター、アサシン（偽）。バーサーカーとセイバー、アーチャーは除外するとして、私が合いまみえていないサーヴァントは」

ライダー、アサシン（真）である。

「ふむ。ではライダーとやらに当たつてみるとしよう。騎乗兵、か。ワラキア軍のような者か？」

己が内包する1軍を思い出すがそれは無いだろう。

なぜなら私の車は肉片はおろか一滴の血さえも残らず”飲んだ”のだから。

アサシンは偽とはいへ一度交戦しているのでライダーに興味が湧いたアーカード。

とりあえず情報を集めるとしよう。今日も吸血鬼は夜の冬木へと舞い踊る。

「日本、か」

航空機の中でアンデルセン神父は呟いた。

その表情はこれから殺し合いに行くとは思えない程穏やかだった。それは今彼が考える人物のせいであろう。

「確かに由美江の出身地でしたね。彼女を同伴できなかつたのは残念ですが…お土産でも買つたら喜んでくれるでしょう」

二コ二コと身内の事を思い笑う。今の彼は誰が見ても神の愛を伝え、教える聖職者のソレである。

「…そんな表情も出来るんですねアンデルセン神父」

「何を仰るシスター・シエル。私はいつでもどこでも教徒を愛する男です。まあ確かに”家族”的事でしたので顔が綻んでしまつのも仕方がないでしょう」

同乗するシエルは教会で見る殺戮神父との心優しき（ひほい）神

父、どちらが素なのかと考える。

「どちらも素なのが性質が悪いですねえ、と結論づけたが。なんだか遠野の屋敷の割烹着メイドに似てる、と思つ。裏表的な意味で。

「こつでもどいでも。そつ、いつでもどいでも私は異教徒の糞共をぶち殺す誠実なる使徒ですので」

ふふふ、と笑うアンデルセン。
うへえ、と眉を顰めるシエル。

「とりあえず冬木に付いたら教会支部に顔を出しましょ。言峰神父にアーカードの件、話さないといけませんし」

「言峰だと？」

一転。アンデルセンの顔が恐ろしい物へと変わる。このよつな変化に慣れているシエルだったがやはり気になつた。

「言峰神父については調べました。一時は代行者になつた程の男です。調べるのは容易い事でしたが…」

何の問題も無かつたですよ？ とシエル。

「言つただろ？ それが問題なのだ」

腕を組みながら唸る。

どういふことですか？ とシエルは続けた。

「ふう。目が腐っているのか代行者。いや、頭か。度し難いな」

「かつちーん。良いから説明して下さいよ」

「ふむ。では奴の過去の話をしようか。奴に妻と娘がいた事はしつているな?」

「え、ええ。娘さんは今教会が預かりシスターとして働いていますね。奥様は…お亡くなりになられていますね」

「ああ。私は彼女とも面識があった。まあ1・2度という少ない物だが。その縁もあって彼女の葬儀には私も出席したのだよ」

田をつむつ當時の事を思い出す。

「そこ」で私は信じられぬ物を見た

「…何を見たんですか?」

「嘆き、悲しむ言峰を、だ」

「それは…当然の事でじょう。何の問題が?」

「ああ、嘆き悲しんでいたぞ。妻の死を。そして口の不甲斐なさをな」

「不甲斐なさ、ですか」

「『どうして』とあの女を苦しめる事が出来なかつたのか』、とな

「なつ」

余りの言葉に息が止まる。まさかあの言峰神父がそのような事を？
教会内部では評判が良いあの男が？
シエルとて面識が無かつたわけではない。一度だけだが第後者の任
を共にした事があった。

その時の彼の印象は寡黙だが誠実な使徒であった、と感じたのだが。

「奴は笑っていたのだよ、泣きそうな顔でな。化け物を飽きたほど
見、殺してきた私にはすぐに分かつたさ。
奴の異常、いや、異端性をな。言峰の在り方は異端だ。それこそ
我々”が本来狩るべきである程に。
しかしあの男程聖職者に向いている人材もあるまい。皮肉な事だが
な」

そう、言峰は全てを愛している。人の罪も、欲も、悪でさえ。
全て愛する聖職者としてこれほど相応しい人物はいないだろう、と
アンテルセンは言つ。

「だからだ。この聖杯戦争を奴が黙つて監督役などといふ役職に就
くわけがなかろう。
具現する地獄を愛で、更に生まれる新たな惡を寵愛するに違いある
まい」

「それじゃあ私達は言峰神父を討つのですか…？」

「そのような素振りを見せたら、の話しだがな。忘れたか、私の目
的は唯一つ。アーカードだ」

またも目がランランと輝くアンテルセンにため息がノンストップシリ

エル。

どうしたらこの男を止められるのか。

シェルは機内で御祈りをささげる事しか出来なかつた。

「（恨みますよナルバレック、マクスウェル卿！）」

日本到着まで残り12時間。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3239x/>

聖杯闘争

2011年10月22日04時44分発行